

Library Navigator

立命館大学 図書館だより
ライブラリーナビゲーター

ISSN 1345-3343

Vol. 129

Spring/Summer
2022



図書館イメージキャラクター：よむりす

[図書館長からのメッセージ]

新入生の皆さんへ

重森 臣広

立命館大学図書館長 政策科学部教授

[特集1]

キャリアセンター部長（経済学部・紀國 洋教授）と学生ライブラリースタッフの対話

コロナ禍のキャリアデザインに必要なもの

小さな挑戦を重ねて視野を大きく広げよう

[特集2]

図書館活用のクイックガイド

[連載企画] 図書館の使い方がうまいヒト 第4回

人と人との繋がりを大切に、
自分のリサーチ・クエスチョンを突き詰めよう
廣野 美和（グローバル教養学部 准教授）

[連載企画] Library Collections 第2回

「時代祭」と西園寺文庫



RITSUMEIKAN
UNIVERSITY

新入生の皆さんへ

重森 臣広

立命館大学図書館長 政策科学部教授



1959年北海道生まれ。中央大学法学部、同大学院法学研究科で政治思想を専攻。1991年、熊本大学専任講師。1994年に政策科学部が設置されると同時に立命館大学へ赴任。趣味はドライブ（ほとんどが通勤）、音楽鑑賞（クラシックとジャズとピアノが好き）、読書（ほとんどが仕事）。

2022年度が始まりました。新入生の皆さんには、心よりご入学のお祝いを申し上げます。在学生の皆さんには、新たな学期を迎え、勉学、課外活動等に実りある一年であることを願ってやみません。

二年以上に及ぶパンデミックは、こうした苦難を乗り越えることのできる社会の強靱化が課題であることを示してくれました。治療や予防に直接関わる医療分野はもちろんですが、およそありとあらゆる学問分野がこの課題への取り組みが求められているといってもよいでしょう。そうした取り組みの成果が、この二年間に露呈した私たちの社会の弱点を解消する手立ての発見に役立つかもしれません。また、そこで得られた新しい知見や価値観が苦難を乗り越えるために必要な心の強さを生み出してくれるかもしれません。苦境や危機の最中にあるからこそ、学習や研究活動そのものの意味が浮き彫りになるといえるでしょう。

大学図書館は、そうした学習・研究活動を支援する重要な基盤の一つです。学術研究は、これまでの長い時間の経過の中で堆積された成果の上に、また一つ新たな頂点を築く活動です。大学図書館は、そうした学術的知見の貯蔵庫のようなものです。また、どの分野においても日々刻々と新しい知見が生み出されています。大学図書館はいち早くそうした知見を活用できるように蔵書資料を刷新し続けています。

近年、書籍・論文・資料の刊行や利用の様態が大きく変化してきました。電子化された書籍が大幅に増え、学術雑誌も電子化されています。各種資料のデジタル化も進みました。立命館大学図書館は、そうした変化に対応できる利用環境の整備を続けてきています。

かつて図書館での勉強といえば静粛な環境の下で黙々と行われる孤高の活動のようでした。しかし、それだけでは十分ではありません。考えてみれば学習や研究には意見交換や相互批評のような共同作業が不可欠です。立命館大学図書館は、過去から現在までの知見を集積する図書館にこそ、そうした場が必要であると考え、ラーニング・コモンズ（びあら）と呼ばれる開放的な空間を設けてあります（ただし、閲覧室ではお静かに願います）。

立命館大学図書館が、皆さんの学習・研究活動のホームグラウンドとして活用され、皆さんの伸びやかな学びを促し、数々の知的発見につながることを願ってやみません。

コロナ禍のキャリアデザインに必要なもの

小さな挑戦を重ねて 視野を大きく広げよう



コロナ禍は就職活動のあり方も大きく変えました。企業説明会や面接のオンライン化が進み、就職活動生同士の情報交換も以前のようにできなくなっています。そんな中でも、膨大な情報の中から自分に必要なものをつかみ、的確に行動して、希望をかなえるにはどうすれば良いのでしょうか？そしてコロナ後の就職活動はどのようなようになるのでしょうか？

アフターコロナも見据えたキャリアデザインと就職活動について、立命館大学キャリアセンター部長の紀國洋先生に、学生ライブラリースタッフの2名がお話を聞きました。

語り手

紀國 洋教授

(立命館大学キャリアセンター部長・経済学部教授)

聞き手

今中 峻太さん

(学生ライブラリースタッフ・情報理工学部3回生)

片岡 明日香さん

(学生ライブラリースタッフ・経済学部4回生)

【立命館のキャリア教育の特徴は？】

入学後すぐキャリアに関する 正課授業があること 現実の課題に向き合う機会があること

今中——まず、立命館大学のキャリア教育の特徴について教えてください。

紀國——立命館大学では、入学時から正課の授業としてキャリア教育を提供していること、また、授業の中で社会の課題に向き合ってもらえるさまざまな機会を用意していることが大きな特徴だと思います。

例えば1回生の教養科目「社会と学ぶ課題解決」は、企業の方に自社で抱えるリアルな課題を提示していただき、その課題に対して学部横断型のチームでその解決に挑戦する授業です。企業の方が教室に来られ、学生の提案に対する評価やフィードバックをくださる機会もあります。低回生のうちから社会を見る目を育てることはもちろん、チームの中でディスカッションやプレゼンテーションに取り組むことによって、プロジェクトマネジメントも学べる科目です。

キャリアセンターでも、就職活動期の支援だけでなく、1、2回生向けのセミナーなども開催しています。1、2回生を対象に「自分とは何か？」を考える機会や、社会ではどのような仕事や働き方があるのかを知る機会を提供しています。

立命館大学ならではの就職支援の仕組みとして、学生同士、学生と卒業生がつながる「スチューデント・ネットワーク」があります。就職活動を終えた学部4回生・大学院2回生は、自らの経験をもとに、身近な先輩としてアドバイスを行ってくれます。後輩支援に熱心なOBOGにはキャリア・アドバイザーとして登録いただき、相談会や模擬面接練習会に来ていただいています。昨年、オンラインでOBOGを訪問できるプラットフォームを導入しました。これによって、OBOG訪問のハードルが下がり、本音ベースでの相談がしやすくなりました。現在、1300人以上のOBOGに登録しています。オンラインツールはあくまで手段であって、「後輩のために何かしてあげたい」というOBOGの熱い想いがこのプラットフォームを支えていると思います。

【コロナ禍の就職活動の現状と今後の見通しは？】

主体性が問われる状況は続き 今後は「個」の力がさらに重要に

片岡——コロナ禍での就職活動の現状について教えてください。

紀國——コロナ前は対面で行われていた企業説明会や面接が、今はほとんどがオンラインになりましたね。そこは学生にとってプラスの面もあると思います。時間を効率よく使えるようになり、例えば授業の合間に面接を受けられるようになりました。交通費の節約も大きな利点です。

一方でマイナス面も現れています。それは就職活動が個別化されているということです。情報はいくらでもありますし、企業とのアポイントメントも簡単になりましたが、主体的に動こうとしなければ就職活動を始めることができなくなっているのです。以前なら、スーツを着た学生をキャンパスや駅で見かけたと思います。今はほ



んどいなくなりました。スーツ姿の学生を見て自分も「そろそろ始めなければ」と思う人も多かったのですが、今は他の学生がどうしているかが全然分かりません。コロナ禍で一番大きく変わったのが、学生の主体性がいっそう求められるようになったということだと思います。

また、在宅で就職活動をするようになると、キャンパスに来る機会が少なくなり、キャリアセンターへの相談や、友達同士での情報交換がしにくくなっていく面もあると思います。就職活動中は友達同士でも気を使ってしまうものです。キャリアセンターでは、就職活動の相談だけでなく、就職活動生同士が本音を語り合う企画も行っているのでも、気軽に参加して欲しいと思っています。

今中——今後、就職活動はどのようなようになっていくのでしょうか？

紀國——コロナが収束し、アフターコロナの社会になっても、以前のようにすべてが対面に戻るかといえば、私はおそらく戻らないと思っています。企業は効率よく採用活動を進められますし、さきほどお話ししたような学生にとってのプラス面もあるからです。主体的に情報を集め、自分なりに解釈して、どう行動するかを決める。そのことを一人ひとりが自覚する必要があるでしょう。そして、日本の雇用慣行、例えば年功序列や終身雇用などは劇的に崩れていくと思います。これまでなら定年まで勤めることを想定して就職をする学生が大多数でしたし、日本では就職＝就社のイメージでしたが、これからは「どの会社に入りたいか」よりも「どんな仕事をしたいか」がより重要になると思います。以前なら会社が長期計画で人材育成をしてきていました。しかし、これからは自分で自分のキャリアを切り拓いていかなければなりません。これを負担と感じるかもしれませんが、むしろ、チャンスと捉え、自分が納得できるキャリアを歩んで欲しいと思います。





【就職活動にどう備える？】

挑戦を通して視野を広げよう 自分に必要な情報は自ら取りに行こう

片岡——就職活動に向けて、1回生の時からどのようなことをしておけばよいのかを教えてください。

紀國——司法試験のような難関試験を目指す場合は、1回生から目標を定める必要があると思いますが、そうでない場合は、「就職活動のために何かをする」というのは、1回生では少し早いのではないのでしょうか。

私は、1回生は視野を広げる時期だと思います。「自分が何をやりたいのか」を知ることも重要ですが、それと同時に「自分には何ができるのか」を考え、できることを増やすことに挑戦して欲しいと思います。今していることが何の役に立つのか現時点で分からなくても、やってきたことが将来的に役に立つということはいくらでも起こり得ます。何か行動を起こすこと、それ自体に視野を広げる学びがあり、成長にもつながると思うのです。

大学にはさまざまなチャンスが転がっています。与えられたものをこなす日常ではなく、ぜひ自分から挑戦をしてください。大きなことでなくてもいいんです。小さなこと、例えば、今までルーティンでやっていたことをちょっと崩してみることも挑戦だと思います。身近な例では、新しい分野の友達を作ってみるのも挑戦です。心地よい人間関係も必要ですが、考えが違う人、価値観の違う人からも刺激を受けることができますと思います。

新しいことへの挑戦にはリスクがつきものです。「恥をかくなじゃないかな？」と躊躇することもありますが、しかしお伝え

したいのは、恥をかけるのも、失敗が許されるのも学生の特権だということです。皆さんにとって今は本当に貴重な機会なんです。だからこそ小さなリスクをとって、一步を踏み出してほしいと思います。

片岡——就職活動を始めて感じるのは「自分の好きな仕事」を見つけることの難しさです。どうしたら見つけれられるのでしょうか。

紀國——すごく本質的な質問ですね。毎日「仕事楽しい！やりがいがある！」と思っている人は、実は少数派だと思います。仕事とは対価をもらうことなので、成果を出すことが必要となってきます。そう考えると、自分の好きなことで成果を出す、対価をもらえるという状況は、現実には少ないのかもしれない。今の質問は、就職活動中に悩むことでもあり、就職してからの悩みでもあると思います。自分の仕事にどんな意味があるのかと考えたり、合わない、つらいと感じたりするのは、就職して1、2年目ではよく聞く話です。その時期にすぐ悩んでいた卒業生が、次に会うと、できなかったことができるようになったと晴れやかな顔で話してくれるのもよくある話です。こうした例を見ると「できるようになると好きになる」あるいは「好きかどうかは別として面白くなる」ということがよくあるのではないかと思います。

ですから、仕事を選ぶ軸になるものとして、好きだからという場合もあれば、自分がその分野で成長できそうという場合、さらには社風や社員の人柄などの環境で選ぶ場合もあると思います。いくつもの軸の中で、自分が絶対に譲れないものは何かを見つけるとよいのではないのでしょうか。好きかどうかにかかわらずその仕事を排除してしまうのは、将来好きになる可能性をつぶして道を狭めてしまうことにつながるような気がします。

片岡——就職活動に関する情報が多すぎて逆にどれを参考にするべ

きかが難しくなっていると思います。自分の欲しい情報をしっかりキャッチするためにはどうすればいいのでしょうか？

紀國——こうすればいい、こうしてはいけない、というノウハウみたいな情報は世の中にたくさんあるでしょう。就職活動に正解は無いので、細か過ぎることに囚われる必要はありません。それよりも、自分なりの軸になるものを見つけることの方が大切です。そうすれば、必要な情報とそうではないものが判断できるようになるのではないのでしょうか。また、さきほどは、OBOG訪問の話でしたが、訪問して得られることは他の人が持っていない自分オリジナルの情報になります。そんな自分なりの情報を得ることが就職活動ではすごく有利に働くような気がします。降りてくる情報は全員に公平ですが、自分で取りに行った情報は自分だけのものとなります。そちらの方を増やすようにすると思いますよ。

私の立場としては、「キャリアセンターからの情報を受け取ってくださいね」と言いたいのはもちろんなのですが、「欲しい情報は自分で探す」「友達と情報交換する」「自分から大学や先生、OBOGに聞いてみる」というのが大切だと思います。授業でも、「ここがどうしても理解できない」とか、「私は違う意見です」とか、そのようなことを言う学生は大歓迎です。質問があれば、授業では触れられなかった内容も紹介することができます。これと同様に、就職活動でも、聞きたいこと、知りたいことがはっきりしている学生は、自分にとって必要な情報を得て、パッとチャンスをつかんでいる印象があります。

【学生へのメッセージ】

今までとは違う景色を見るために 小さなリスクをとって挑戦を

今中——最後に、学生へのメッセージをお願いします。

紀國——折角の機会ですので、本の紹介を通してみなさんにメッセージを送りたいと思います。

まず1冊は、加藤諦三著「大学で何を学ぶか」です。悩める若者の背中を押してくれる言葉がいくつも書かれている本で、私も若い時に踏み出す勇気もらいました。

本の冒頭の節のタイトルは「感動はどこにあるのか」です。いくら努力してもできなかったことが、ある瞬間できるようになった、その時の感動は経験してみなければ分からない、感動は経験した人だけのものということです。「気にしているのは自分だけなのではないか」ということも書かれています。人には評価されたいという欲求があります。それがモチベーションになる側面はあります。しかし、それを気にし過ぎると自分が本当にやりたいことが分からなくなるかもしれません。自分のやりたいことが人から評価されるためにすり替わっていないかを問う必要があります。

「人は決断の前で、いままで握っていたものをいっさい離さなければならない」という言葉も印象に残っています。これは踏み出す勇気のことを言っています。踏み出すことは誰でも恐いと思います。赤ちゃんがハイハイから立ち上がる時、必ず転びます。それでもなぜ立とうとするかといえば、立ったら視界が変わるんです。小さなリスクをとって行動すると、見えるものが変わってきます。実は誰もが赤ちゃんの時から経験して知っていることなんです。「何のために努力するか？」と問われれば、私は「違う景色を見たいか



ら」と答えます。今までやらなかったことに挑戦すると、少し景色が変わります。失敗ももちろんあります。でも、そうすると許容できる範囲も変わります。

もう1冊は、ティナ・シーリグ著「20歳のときに知っておきたかったこと」です。著者はTEDでのスピーチやNHK「スタンフォード白熱教室」でも有名な方ですね。さきほどお話しした「小さなリスクをとろう」は、この方の言葉です。特に印象に残っているのは「今日会った人に感謝の言葉を送ってみよう」というものです。著者は大学の奨学金の審査を行っています。しかし、採択できるのはほんの一部で、ほとんどの学生は不採択になります。不採択の学生から連絡があることは稀ですが、中には苦情を言ってくる学生もいるようです。そんな中である時「応募したことですごく勉強になりました。機会を与えていただいたことに感謝します」というメールがあったそうです。その時、彼女はその学生に連絡をしたくなり、別の研究プロジェクトに招待したそうです。感謝することによって新たな道が開けたのです。

感謝のメールを書くということは小さな挑戦です。でもそれは、もしかしたら人生を変える出来事や人との出会いにつながるかもしれない。皆さんはそのことをどう考えるのでしょうか？

自分を変えられるのは自分しかいません。私は「小さなリスクをとって小さな挑戦をしてほしい」というメッセージを皆さんへ送りたいと思います。



図書館活用の クイックガイド



みなさんは図書館についてどのようなイメージを持っていますか？ おそらく「本を読む場所」「自習をする場所」「私語厳禁で静かな場所」と考えられている方がほとんどではないでしょうか。しかし、大学図書館ではディスカッションができる施設や資料検索の相談ができるサービスなど、みなさんの学びを支援する便利なサービスがたくさんあります。そのなかでもイチオシの図書館サービスを4つご紹介します！

図書館を利用して困った時は、スタッフにお気軽にご相談ください。
また、図書館の最新情報はWEBでチェックできます！ぜひご覧ください。



▶ 立命館大学図書館ホームページ



▶ 立命館大学図書館公式Twitter



▶ 学生ライブラリースタッフホームページ

動画で学ぶ図書館の利用方法

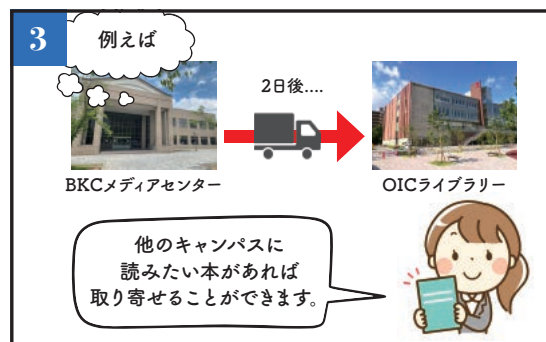


More Information

図書館の利用方法などをご覧ください。
▶ [動画による図書館の施設紹介](#)

これからのレポート作成や論文執筆に役立つ図書館ガイダンス動画をご確認いただけます。
▶ [図書館ガイダンス（学生向け）](#)

WEBでの本の取り寄せ



More Information

予約/取り寄せの詳細は下記をご確認ください。
▶ [予約・取寄せ・リコール](#)

利用したい本が図書館に無い場合はMyLibraryから本の購入リクエストを送付できます。あわせてご利用ください。
※リクエストされた本は収書基準に基づき購入の可否を判断します。
▶ [MyLibrary](#)

グループワークがしたい



More Information

びあら（ピア・ラーニングルーム）やセミナールーム、プレゼンテーションルームでは新型コロナウイルスの影響により飲食（蓋つきの飲み物含む）、座席の移動が禁止となっています。利用の際は館内掲示等を確認し、ルールを守ってご利用ください。

レポート課題で困った時は



More Information

レファレンスカウンターでは相談しづらいという方はオンラインサービスをご利用ください。
▶ [Ask a Librarian](#)

図書館の蔵書検索や論文検索方法等が記載されたパンフレットをご覧ください。
▶ [RIS（情報検索の手引き）](#)

人と人との繋がりを大切に、 自分のリサーチ・クエスチョンを突き詰めよう



廣野 美和
グローバル教養学部 准教授

レポートや論文にとりかかるのがおっくうな時はありませんか？ まとまった時間がないと書けないと思っていませんか？ 今回は、グローバル教養学部の廣野先生に、情報を集めてレポートや論文を書く時の具体的なアドバイスや、研究者として「事実」とどう向き合うかについての知見を伺いました。

| | |
|-------|---|
| 研究テーマ | 中国の平和維持活動、人道主義、開発援助、紛争仲介 |
| 専門分野 | 国際関係論、中国地域研究 |
| 著書 | 『一帯一路は何をもたらしたのか：中国問題と投資のジレンマ』 勁草書房（2021年） |

研究内容について

● 紛争地域の国々の視点で中国を研究

私の専門分野は中国の国際関係論です。今、注目しているのは、南スーダンやミャンマー、アフガニスタンなどの紛争地域で、中国がどのような役割を果たしているかということです。

中国に関する議論はイデオロギーによりがちで、紛争地域でも、中国が一方向的に現地の国々を牛耳っているという印象を持つ人がいるかもしれません。しかし、実際に行ってみると分かりますが、現地の国々は、近づいてくる大国を自らの利益の為にいかに利用するかという視点を常に持っています。私は、それらの国々が、中国をどう見て、どう利用しようとしているかを研究することを通して、紛争地域での中国の役割を明らかにしたいのです。

● 国際関係＝リーダーとフォロワーといった「人と人」の関係

いま私が研究を進める中でフォーカスしていることは、国際関係におけるフォロワーシップについてです。国際関係で大国がリーダーシップを発揮するには、(投資先や援助の提供先である諸外国といった)「フォロワー」からの支持が不可欠です。つまり相互の関係がなければ、リーダーシップは成立しないということです。では、フォロワーはリーダーシップを発揮する中国をどう捉えているのでしょうか。中国を悪者にすることも、経済発展のチャンスと捉えることもできます。つまり、リーダーの評価は、フォロワーがリーダーをどう見ているかによって大きく異なってきます。言い換えれば、国際関係は、人と人の関係です。本来なら子どもにも分かるようなシンプルな話のはずなのですが、私たちはそのことをつい忘れがちです。世界のほとんどの国は発展途上国ですから、彼ら(発展途上

国)が中国を、そして世界をどう見ているかという視点は、国際関係を考える上でとても重要だと思います。

● 推測ではなく、事実を捉える

私の新編著『一帯一路は何をもたらしたのか：中国問題と投資のジレンマ』では、中国の一帯一路について、イデオロギーや推測を排した考察を行いました。通常、大規模な国家プロジェクトは予算や実施年数が明らかにされているものです。しかし一帯一路にはそれが不明のため、推測に基づく考察が行われているのが現状です。その現象をわかりやすく解説されているのが、東京大学の高原明生先生です。先生は、一帯一路を星座にたとえています。空に星があることは科学的に証明できますが、その星と星を線で結んだ星座は、実在するものではなく、人々が生み出した「考え方」であると。「考え方」にはそれなりの意味があるかもしれませんが、星座そのものが実在すると考えると、見当違いの話になります。一帯一路についても、実際には存在しない「線」が実在すると考えてしまうと、間違った分析になってしまうのではないかと、私はそう危惧しています。

星座の線ではなく、星を見る。実際に造られたダムや道路を観察し、実際にそこに住む人からの話を聞く。そういった「事実」(生のデータ、いわゆる一次資料)など、見たり触れたり聞いたりできることの確認を怠らないことが、研究の根幹に必要なだと考えています。

いつもゼミ生に伝えていること

● 勝手な思い込みをしないこと

ゼミ生によく言っているのは、"Don't make assumptions" 勝手な思い込みをしないでほしいということです。相手の名前、顔立ち、

国籍で、その人の考え方で先入観をもって捉えるような思い込みは危険です。

例えば、中国の学会に行っても、「では廣野先生の日本的考えを聞きましょう」と言われることがあり、そういった「定義づけ」に大なる違和感を覚えます。私はたまたま日本人名を持ち、日本の国籍を持っていますが、考え方や捉え方は誰かに先に規定されるものではないはずです。「日本の考え方」「中国の考え方」、そういったバイアスは、研究上はむしろ邪魔になるものだと思います。全ての「日本人」や全ての「中国人」が同じように考えるわけがないのです。一般化をやめて思い込みを疑うことが重要です。それは論文を読むときも同様です。筆者の背景と議論の内容との関連を分析することは重要ですが、筆者の表面的な所属や肩書きなどに先入観をもちながら読むことは、研究者の態度として望ましくありません。それは人と人の関係でもいえると思いますが、勝手な思い込みから誤解が始まり、差別にもつながりかねません。

ゼミ生にも、ステレオタイプに当てはめて物事や出来事を捉えず、ありのままの事実を浮き彫りにできるよう、一次資料そのものに真実を語らせるよう、伝えています。解釈や推測に基づく議論には、本当にそのような主張をするだけの実証的な証拠があるのか、ということをつきつめる姿勢が肝要です。

論文を書くためのアドバイス

● よく使うデータベースについて

学生と一緒に使っているのは、「[ProQuest Central](#)」。中国関係では「[CNKI 中国学術情報データベース](#)」で中国発行の雑誌などをよく見えています。中国はデータを公表しないことで有名ですが「[北大法宝](#)」はとても重宝しています。中央政府や地方政府が制定するすべての法律や判例、外国と結んだ条約や宣言など、公式のものがすべて提供されているからです。「[RUNNERS Discovery](#)」もよく使っています。

図書館からの アドバイス

データベースは、キャンパス内はもちろんご自宅からでも利用することができます。ご自宅からデータベースを利用したい時は、「[RITSUMEIKAN IT サポートサイト](#)」のVPNから手続きをしてください。



● 論文は書くものではなく、積み上げるもの

「論文は書くものではない」と言うと、驚かれるかもしれませんが。論文はビルドアップ、組み立てていくもので、ひとつひとつの要素は積み木のピースです。それをいかに整合性のある形で積み上げていくかという考え方をするとよいと思います。最終的な「論文」という山の大きさにたじろぐことなく、小さな積み木(例えば1段落)を作って、全体像を考えながら積み上げていくイメージで取り組んでみてはどうでしょうか。今日はこの段落を30分で書こう、今15分あるからこの3文だけ書こう、というタイムマネジメントの発想もできるようになると思います。

● 論文を書くのに悩んでいる人へ

おすすめは、[Air & Light & Time & Space : How Successful Academics Write](#)。世界中の100人の学者に、それぞれの執筆スタイルを聞いた本です。いつ書くか、どこで書くか、さまざまな経験談やアイデアが語られていてアカデミックライティングに関する「みんなちがって、みんないい」のような内容です。読んでみると「こんな書き方をしてもいいんだ!」と楽しくなると思います。私もこれを読んだから、朝起きてすぐ、脳みそがフレッシュでシャープに考えられる時間に30分だけでも書くようにしています(起きられない時もありますが)。これをするだけで、一日が素晴らしい感じで始まるよう

になりました。

図書館の使い方について

● 想定外の良本に出会えることがある

最近、大学図書館が契約しているデータベースを使うことが多くなっています。それでも、実際に書架に行く時は今もワクワクします。なぜなら、探していた本の周囲で、想定外の良本を発見することがあるからです。その瞬間の興奮は、図書館で本を探す醍醐味ではないでしょうか。

新入生の皆さんへのメッセージ

**図書館からの
アドバイス**

立命館大学には衣笠キャンパス、朱雀キャンパス、びわこ・くさつキャンパス、大阪いばらきキャンパスの4キャンパスに計7つの学習図書館があります。廣野先生は授業の準備でOICライブラリー、研究活動で修学館リサーチライブラリーを利用されているとのこと。

● 「どこにいるか」ではなく「何を求めるか」が大切

新入生の皆さんの中には、コロナ禍によって、想定していた通りの人生にならなかったという人がいるかもしれません。私にも、自分の意志に反して外国から日本へ帰国せざるを得ず、人生がまるで変わってしまったことがあります。でもその経験を通して、自分の好きなこと、できること、人との関わりで学べることは、どんな環境にいても変わらないんだということを知りました。どこにいるかよりも、何を求めるかが大切です。それによって、開ける世界が変わってくるのだと思います。そして予期せずに帰ってきた日本での生活は大好きです。立命館での素晴らしい出会いに感謝しています。

| 廣野先生の日 | |
|--------|--|
| 6:00 | 起床 論文執筆 |
| 7:00 | 朝食の用意、8歳の息子と愛犬の対応 「カオスの時間」 |
| 8:00 | 家事 |
| 8:30 | 副学部長の仕事 会議と仕事メール。 木曜日は授業と学生の論文指導 |
| 19:30 | 夕食、夫と家事 「宿題しなさい」の時間 |
| 20:30 | 「早くお風呂に入りなさい」の時間 |
| 21:00 | 「まだ入ってないの？」の時間 |
| 21:30 | 「いい加減にしなさい」の時間 |
| 22:00 | 息子就寝 |
| 22:30 | 仕事メールと翌日の準備(または息子と寝落ち) |
| 24:00 | 就寝 |

Value Interpersonal Connections and Probe Your Own Research Questions



Miwa Hirono
Associate Professor, College of Global Liberal Arts

Do you find it hard to start writing an essay or dissertation? Do you think you need a block of time to write? In this volume, we asked Professor Hirono of the College of Global Liberal Arts for advice on specific methods for gathering information and writing essays and dissertations, and how to approach “facts” as a researcher.

| | |
|-----------------|---|
| Research Themes | Chinese peacekeeping, humanitarian assistance, development assistance, and conflict mediation |
| Specialization | International Relations, China Studies |
| Publications | <i>China's Evolving Approach to Peacekeeping</i> , London: Routledge 2012 |

On My Research

Studying China from the Perspective of Countries in Conflict-Affected Areas

My expertise is in China's international relations. I am currently focusing on what roles China plays in conflict-affected areas such as South Sudan, Myanmar, and Afghanistan.

Today, discussions about China tend to be ideological. Some may have the impression that China unilaterally controls many countries in conflict-affected areas. However, when you actually go to those countries, people there always consider how they can take advantage of the approaching superpowers. I am examining how people in such countries perceive China and attempt to utilize it for their own interest. Based on my examination I aim to analyze China's roles in conflict-affected areas.

Seeing International Relations as “Interpersonal Relationships Between Leaders and Followers

My current research focuses on “followership” in international relations. For a great power to demonstrate leadership in international relations, it must receive the support of its “followers” (defined here as foreign countries in which it invests and to which it provides aid). In other words, without followers, leadership cannot exist. So, how do followers view China in the leadership role? They can see China as either a problem or an opportunity for economic development. The reputation of a leader greatly depends on how the followers view the leader. In other words, international relations can be understood as interpersonal relationships. This understanding is actually quite simple – something that even a child can understand – but it is easy to forget. Since most of the countries in the world are developing countries, how they perceive China, and view the world, is very important to understand when thinking about international relations.

Do Not Speculate; Obtain the Facts

In my new edited book, *Ittai Ichiro wa Nani wo Motarashita no ka: Chūgoku Mondai to Tōshi no Jirenma (一带一路は何をもたらしたのか：中国問題と投資のジレンマ (What the Belt and Road Initiative Has Brought Us: The Issue of China and Investment Dilemmas))*, the various authors and I attempted to examine China's Belt and Road Initiative without ideology or speculation. Usually, large national proj-

ects have a clear budget and a clearly specified project duration. However, the Belt and Road Initiative does not come with either piece of information. So, the literature on the Initiative is often based on speculation. Professor Akio Takahara of the University of Tokyo explains this state of the literature by analogy with a constellation of stars. Stars exist, which is scientifically proven. However, the constellations that we speculate connect the stars with lines do not exist in reality. Rather, they are merely a way of thinking about the stars. The constellations are meaningful in themselves, but it is wrong to assume that the constellations themselves exist in reality. Same with the Belt and Road. If you think there exist certain connections, where such connections do not exist, you will end up with a faulty analysis. This is what I am worried about in my own research.

Look at the stars, not the lines in the constellation. Observe the dams and roads that have actually been built, and listen to the stories that residents tell. These are the “facts” (i.e., raw data, called primary sources), which we can see, touch, and listen to. It is fundamentally important to the core of any research to check your “facts”.



Interviewing victims in the aftermath of the 2015 Nepal earthquake about China's humanitarian assistance (at a village near the Nepal-Tibet border)

What I Always Tell My Seminar Students

Don't Make Assumptions

I often say to my seminar students, “Don't make assumptions.” It is dangerous to make assumptions about how other people think based on their names, looks, or nationality, or based on any number of other preconceived notions.



Advice for Writing Essays and Dissertations

Frequently Used Databases

“[ProQuest Central](#)” is a very useful database. I use it and recommend it to my students. For China-related matters, I often look at journals published in China through the [CNKI \(China National Knowledge Infrastructure\) database](#). “[Beida Fabao](#)” ([pkulaw.cn](#)) is also very useful. Although China is known for not publishing data, this database offers all official laws and judicial precedents issued by the central and local governments, as well as treaties and declarations signed with foreign countries. I also use “[RUNNERS Discovery](#)” a lot.

A Paper Is Not Something You Write; It Is Something You Build

It may come as a surprise to you that a paper is not something you write. The process of writing is a process of building. A paper is something to be assembled. Each element of the paper is like a little building block. You can consider how to assemble building blocks in a coherent way. This way, you can create an object while thinking about which blocks lead to the most important question, and in what way. Also, instead of being scared of the size of the “mountain” called a “dissertation,” why not approach the dissertation by making small building blocks (e.g., single paragraphs), and assembling them while thinking about the overall objective? This way of thinking helps time management. You can think, “today I’ll write this paragraph in the next 30 minutes,” or “I have 15 minutes now, so I’ll just write these three sentences.”

For Those Struggling to Write Papers

I recommend you read [Air & Light & Time & Space: How Successful Academics Write](#). This is a book that asks 100 scholars from around the world about their various writing styles. The book discusses a wide range of experiences and ideas on when and where to write, and expresses the idea that “we are all different and are all wonderful” (a verse from a poem by Kaneko Misuzu), when it comes to academic writing. When you read it, you’ll think, “It’s okay to write like this!” and come to enjoy the writing process. After reading this book, I also now try to write for 30 minutes right after I wake up in the morning, when my brain

is still fresh and sharp (although I must admit that I often fail and sleep in a bit). Doing this helps me start my day with a great feeling of accomplishment.

How to Use the Library

The Joy of Unexpected Encounters with Great Books

In my research and teaching, the majority of resources I use come from the electronic databases to which the Ritsumeikan University library subscribes. Nevertheless, I still get excited when I physically visit the library stacks, because I unexpectedly find great books near the books I look for. The excitement of such moments is one of the best parts of searching for books at the library.

Advice from the Library!

Ritsumeikan University has seven libraries across Kinugasa Campus, Suzaku Campus, Biwako-Kusatsu Campus, and Osaka Ibaraki Campus. Professor Hirono uses the OIC library for her class preparation and the Shugakukan Research Library for her research.

A day in the life of Professor Hirono

| | |
|-------|--|
| 6:00 | Wake up and write |
| 7:00 | “The chaos” time – prepare breakfast with my husband and take care of my 8-year-old son and two dogs |
| 8:00 | Do some housework |
| 8:30 | Engage in Associate Dean’s work |
| | Attend meetings and write emails. On Thursdays, teach and supervise students. |
| 19:30 | Prepare dinner and do some housework with my husband |
| | “Do your homework” time |
| 20:30 | “Can you take a bath?” time |
| 21:00 | “Not in the bath yet? Hurry up!” time |
| 21:30 | “C’mon, GET IN THE BATH RIGHT NOW!” time |
| 22:00 | Accompany my son to bed |
| 22:30 | Write emails and prepare for the next day (or fall asleep with my son) |
| 24:00 | Sleep |

For example, when I have attended academic conferences in China, panelists have said, “Now, let’s ask Prof. Hirono for her Japanese way of thinking.” I feel very uncomfortable being defined in such a way. I happen to have a Japanese name and Japanese nationality, but the way I think and perceive things should not be defined by someone else. “The Japanese way of thinking” or “the Chinese way of thinking” is a bias, which is a hindrance in research. Not all Japanese or Chinese think the same way, so is there really a Japanese way of thinking, or a Chinese way? Always avoid generalisation, and always challenge your assumptions. The same can be said of the process of reading papers. While it is important to analyze the relationship between the author’s background and the content of the discussion, reading with preconceived notions based on superficial information like the author’s affiliation or title does not amount to a desirable attitude as a researcher. The same can be said of interpersonal relationships. Assumptions can lead to misunderstandings, which, in turn, can lead to discrimination.

I also tell my seminar students to let the primary sources speak for themselves, so that they (the students) can highlight the facts, rather than perceive things and events through their own stereotypical lenses. Research should be always established with empirical evidence. It should not be interpretation or speculation. It is essential to ask yourself whether there is enough evidence to make a specific claim.

Advice from the Library!

Databases can be accessed on campus or from home. If you want to access databases from your home, please go to the RITSUMEIKAN IT SUPPORT SITE and click on “VPN”.



Message to All New Students

“What You Seek” Matters More than “Where You Are”

Some new students might think that the COVID-19 pandemic may have prevented them from living the student life they had expected. I also experienced a complete change in my life when I had to return to Japan from abroad, against my will. From that experience, however,

I learnt that what I like to do, what I can do, and what I can learn from interacting with others, do not change irrespective of the physical environment I am in. What you seek is more important than where you are. This way of thinking, I believe, opens up the world to you. And now I cherish my life in Japan, to which I returned suddenly, under duress, and completely without a plan. I am grateful for the wonderful encounters I have had at Ritsumeikan.



Presentation on “China and the World Order in Transition?” at the Ash Center at Harvard Kennedy School

「時代祭」と西園寺文庫

衣笠キャンパスの平井嘉一郎記念図書館には、8つの文庫、3つの旧蔵書からなる特別コレクションがあります。これらの資料群は、地下1階の貴重書庫・準貴重書庫に収蔵されており、閲覧や複写の申請を行うことにより利用できます。

本稿で言及する資料は、特別コレクションの1つである西園寺文庫に収蔵されているものです。西園寺文庫には、学祖・西園寺公望が生前、大学に寄贈した有職故実（朝廷内や武家などにおける儀式や習慣のこと。また、それらを研究する学問。）、書翰、書幅などに、その後、初代総長をつとめた学園創立者の中川小十郎が収集した資料（「学宝」ほか）、および図書館が特別に補充した資料などが収蔵されています（詳細は、「立命館大学図書館蔵西園寺文庫目録」(1990年10月30日発行)参照。

なお、この文庫目録には漢籍413点、和書2,884点、洋書174点、逐次刊行物39点、諸資料161点、学宝類317点（軸物24点）が収録されています（一部未収録のもの有）。

さて、今回この文庫を紹介する理由は、みなさんも御存知の京都三大祭の一つである「時代祭」の行列に登場する「山国隊」や「弓箭組」といった明治維新时期に活躍した組織と本学との特別な関わりについて紹介してみたいと考えたからです。

「時代祭」と2つの行列

「時代祭」は、平安神宮の創建と平安遷都1100年記念祭を奉祝する行事として、明治28（1895）年に始まったもので、毎年10月22日（雨天順延）に行われる平安神宮の大祭です。京都で千有余年にわたって培ってきた伝統工芸技術の粋を、動く歴史風俗絵巻として内外に披露することを主な目的としています。その行列は、京都全域からなる市民組織「平安講社」（平安神宮と神苑の維持、時代祭の運営、祭具や衣装の修理・保管を目的に創立された組織で、京都市の11の旧学区を単位として編成）により運営されています。また、その行列編成は6列、人員500名の規模で、現在では明治維新前後のころ、江戸時代、安土桃山時代、室町時代、南北朝時代、鎌倉時代、藤原（平安）時代、延暦（奈良時代末～平安時代初期）時代の8つの時代を20の行列に分け総勢で約2000名もの人々が参加する大規模なものとなっています。

次に、このような「時代祭行列」の中でも特に注目してほしい2つの行列について説明します。

1つ目は、1番最初の行列である「山国隊列」（[維新勤王隊列](#)）です。この行列は、明治維新の際、幕臣が東北地方で反乱を起こした際、丹波の国・北桑田郡山国村（現在の右京区京北）の有志が隊を組織し、官軍に加勢した当時の行装を模したものです。三斎羽織（さんさいはおり）、下には義経袴をはき、筒袖の衣に頭に鉢巻または赤熊（しゃぐま）をかぶり、脚絆を身につけ、足袋、草鞋をはき、刀を身につけ、鉄砲を携えた姿です。また、肩章をつけ階級を表しているところなどは、近代の軍制への過渡期の特徴を示しています。この山国隊は、時代祭の始まった当初（明治28（1895）年）から同村有志が奉仕していましたが、大正10（1921）年より中京区・朱雀学区（平安講社第八社）が引継ぎ現在の名称（[維新親王隊列](#)）で奉仕しています。

2つ目は、最後の20番目の行列である「弓箭組列」です。この行列は、桓武天皇が遷都をした際、天皇の御力の警備にあたったともいわれ、その子孫は明治維新の際、西園寺公望ひきいる山陰鎮撫の任に携わったとも伝えられ弓箭組を模した行列です。お供の人々は引立烏帽子（ひきたてえぼし）に直垂（ひたたれ）を着け、太刀を差し弓箭をたずさえ、時代祭創設当初より御祭神（現在は桓武・孝明両

天皇）の警護役を担っています。

※「時代祭」に関する解説は、平安神宮のホームページの中に掲載されている「時代祭」に関する記事（<http://www.heianjingu.or.jp/festival/jidaisai.html>）（最終閲覧日：2022年1月6日）を参考としています。

西園寺文庫に見る「山国隊」

では、なぜ、これらの二つの行列（「山国隊」や「弓箭組」）と本学西園寺文庫との関わりがあるのでしょうか。

「山国隊（維新勤皇隊）」は慶応4（1868）年1月6日、馬路村（現・亀岡市馬路）と同じ旗本杉浦氏の智業地である山国（現・京都市右京区京北）にも西園寺公望を総督とする山陰道鎮撫使の檄文が届き、その要請に応じ鎮撫使に合流しようとしています。しかしながら桑田・船井郡の弓箭組とは別の運命をたどることになりました。隊は勤皇の意志を認められ、岩倉具視に「山国隊」と命名され、因州藩（鳥取藩）に属して東征に参加、2月13日に京都を出発して、東山道軍先発隊に合流し激戦地を転戦します。従軍中には、官軍であることを示しました。肩員や錦布れ、陣中装束、「魁」の前立がついた黒毛陣笠、ミニエー銃などが配布・貸与され、西洋兵学の部隊指揮のため、行進曲など鼓笛軍楽を修得しました。山国隊は、3月の甲州勝沼の戦い（山梨県）、4月の野洲安塚の戦い（栃木県）、10月の奥州仙台（宮城県）を転戦し戦闘任務を終え、11月に東征大総督（有栖川宮熾仁親王）とともに京都へ凱旋、明治2(1869)年2月18日に故郷山国に帰郷します。約1年の間に7名の戦病死者を出し、出兵中の費用は自費自弁であったため、莫大な借金を背負うことになりました。

以下で示した地図は、「山国隊」が転戦した経路を示した略図で、この地図からも分かるように、この隊が明治維新时期にいかにも多くの戦いに関わったかといったことが分かります（亀岡市文化資料館が2018年2月3日から3月11日まで開催した『第63回企画展 山陰道鎮撫隊－丹波の郷土と幕末維新』の図録より）。

西園寺文庫には「山国隊」に関連する資料として「藤野斎（ふじのいつき）陣中日誌（じんちゅうにっし）」と藤野斎（ふじのいつき）「出張小掌記（しゅっちょうしょうしょうき）」の2点があります。これ

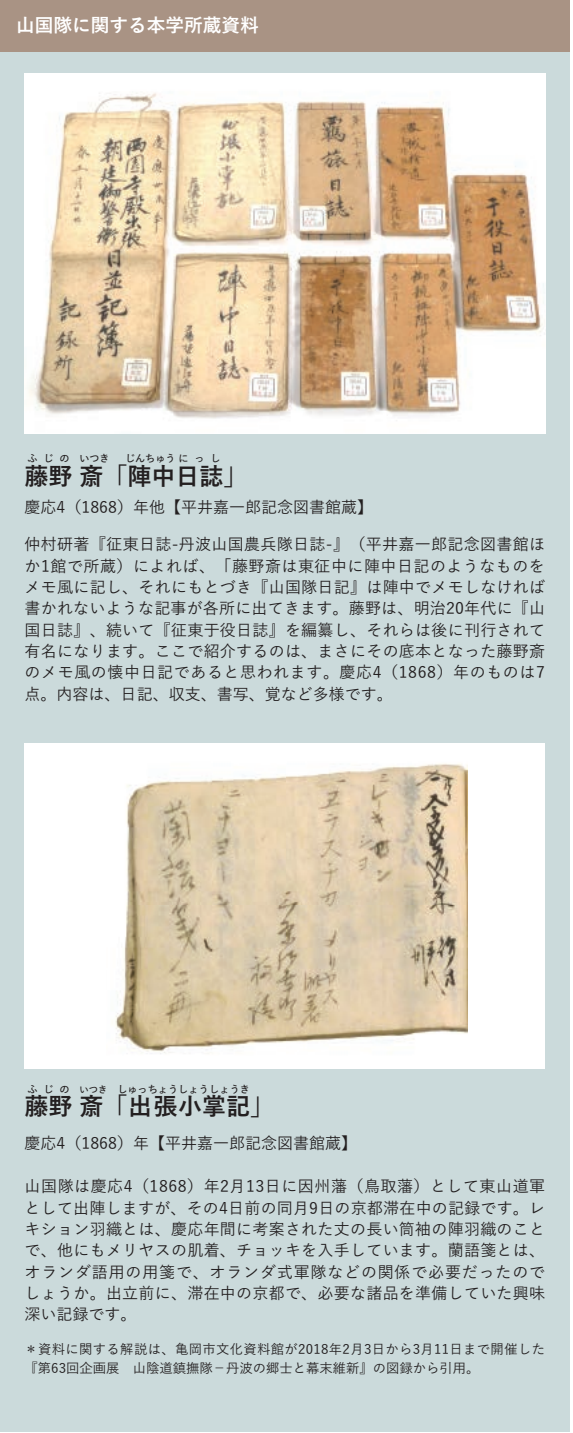


らの資料が所蔵されているのは、学祖・西園寺公望が慶応年間、山陰道鎮撫使総督の任にあったことと無縁ではないだろうと推察されます。

弓箭組、西園寺公望と中川小十郎

「弓箭組」ですが、この組は学祖・西園寺公望が慶応4（1868）年1月6日、戊辰戦争の勃発にさいして山陰道鎮撫総督の任に就いていたことと関係します。西園寺総督は同年1月7日馬路村を発陣し、山陰道を鎮撫し、3月末に伏見に凱旋しましたが、その発陣初日における人見勝次、中川武平太両氏の功を多とし、とくにその主だった者を選んで中軍に置き、1月8日をもって徴募した丹波の弓箭組200余名を統率させ、そのふたりに錦旗守衛の取締りを命じました。それ以後、西園寺家と人見、中川両氏との間には、ほとんど累代の君臣のごとき親密な関係が生まれました。両氏が学祖・西園寺総督ひきいる山陰鎮撫隊に参加したことで、深い縁ができた郷土らは、その後も西園寺を頼り京都や東京で活躍する人物が現れることとなります。本大学の創立者である中川小十郎もその一人となります。

中川小十郎（1866～1944）は中川禄左衛門の長男に生まれましたが、のち武平太の養子となり、明治26（1893）年7月東京帝国大学法科大学政治学科を卒業し文部省に入り（文部属）、明治28（1895）年第二次伊藤博文内閣の西園寺文相の秘書官となりました。西園寺公望と中川小十郎との関係は、このとき以後西園寺の死去までつづきます（奥田修三「『特別展 西園寺公望と立命館』の開催にあたって」『図書館だより 特集号（通号32号）』、1984より）。



ふじのいつき じんちゅうにっし 藤野 斎「陣中日誌」

慶応4（1868）年他【平井嘉一郎記念図書館蔵】

仲村研著『征東日誌-丹波山国農兵隊日誌-』（平井嘉一郎記念図書館ほか1館で所蔵）によれば、「藤野斎は東征中に陣中日記のようなものをメモ風に記し、それにもとづき『山国隊日記』は陣中でメモしなければ書かれないような記事が各所に出できます。藤野は、明治20年代に『山国日誌』、続いて『征東于役日誌』を編纂し、それらは後に刊行されて有名になります。ここで紹介するのは、まさにその底本となった藤野斎のメモ風の懐中日記であると思われます。慶応4（1868）年のものは7点。内容は、日記、収支、書写、覚など多様です。



ふじのいつき しゅっちょうしょうしょうき 藤野 斎「出張小掌記」

慶応4（1868）年【平井嘉一郎記念図書館蔵】

山国隊は慶応4（1868）年2月13日に因州藩（鳥取藩）として東山道軍として出陣しますが、その4日前の同月9日の京都滞在中の記録です。レキジョン羽織とは、慶応年間に考案された丈の長い筒袖の陣羽織のことです。他にもメリヤスの肌着、チョッキを入手しています。蘭語箋とは、オランダ語用の用箋で、オランダ式軍隊などの関係が必要だったのでしょうか。出立前に、滞在中の京都で、必要な諸品を準備していた興味深い記録です。

*資料に関する解説は、亀岡市文化資料館が2018年2月3日から3月11日まで開催した『第63回企画展 山陰道鎮撫隊－丹波の郷土と幕末維新』の図録から引用。